

[別紙 2]

審 査 の 結 果 の 要 旨

氏名 征矢野あや子

本研究は日本の地域高齢者の転倒予防自己効力感を測定する尺度「転倒予防自己効力感尺度 (the Fall-Prevention Self Efficacy Scale, FPSE)」を開発し、その信頼性および妥当性と利用可能性を検討したものであり、下記の結果を得ている。

1. 大腿骨頸部骨折の既往を持つ長野県の地域高齢者と、転倒予防教室に参加した地域高齢者への面接調査から、日常生活活動・動作の中で転倒を意識する場面、行為の項目プールが作成され、地域高齢者に試行しながら項目が精選された。最終的に残された項目は、布団（ベッド）に入ったり布団（ベッド）から起きあがる、座ったり立ったりする、服を着たり脱いだりする、簡単な掃除をする、簡単な買い物をする、階段を下りる、混雑した場所を歩く、薄暗い場所を歩く、両手に物を持って歩く、でこぼこした地面を歩く、の 10 項目であった。これを「大変自信がある」から「全く自信がない」の 4 段階の順序尺度で回答を設定した(これを暫定版 FPSE と呼ぶ)。
2. 長野県 K 村の 65 歳以上の地域高齢者 338 名を対象に暫定版 FPSE の信頼性、妥当性の検討を行った。探索的な因子分析および項目分析から、「薄暗い場所を歩く」

「混雑した場所を歩く」「でこぼこした地面を歩く」「両手に物を持って歩く」「階段を下りる」の5項目からなる「移動SE」と、「服を着たり脱いだりする」「簡単なそうじ・片づけをする」「布団（ベッド）に入ったり、布団（ベッド）から起きあがる」の3項目からなる「身辺動作SE」という2つの下位尺度ができた。これら2つの下位尺度からなる8項目の尺度を「FPSE（総得点）」とした。

3. 先行研究で転倒に関連すると報告されている既知グループ別のFPSEの比較において、女性、75歳以上、転倒歴あり、外出の自粛がある、膝関節痛がある者は、そうでない者に比べて有意に移動SEとFPSE(総得点)が低く、先行研究と同様の傾向を示した。既存の尺度である the Falls Efficacy Scale(FES)とFPSEは $r=0.8\sim 0.9$ と強い相関を示した。また、身辺動作SEと移動SEを説明変数とする外出の自粛の有無のロジスティック回帰分析は、身辺動作SEのオッズ比が0.82(95%信頼区間0.68-0.98)、移動SEが0.83(95%信頼区間0.76-0.91)であった。これらの検討結果はFPSEは身辺動作や移動などの日常生活活動・動作を通じて認識される転倒恐怖である」というFPSEの定義に合致し、解釈に無理のないものであり、また、統計的な妥当性の評価水準を概ね満たすことから、FPSEの妥当性は概ね確保されたとみなした。
4. 内的整合性を示すCronbach's α 係数は、0.76~0.90、再現性を示すtest-retestのカッパ係数は、8項目中7項目で κ が0.4~0.8台で、信頼性を備えていることも確認された。
5. FPSEの特長を明らかにし、転倒予防自己効力感を高め、閉じこもりを予防するケアを、限られた資源の中で住民に効率よく提供するためにどう役立てることができ得る

か検討するために対象を周辺動作 SE および移動 SE の高低によって群別し、移動能力と外出の自粛の有訴率を比較したところ、FPSE は移動能力の低下に伴って移動 SE がまず低下し、その後周辺動作 SE が低下するという順序性がある。また、FPSE の低下に伴って外出の自粛の頻度が増すことが明らかになった。この知見を利用し、FPSE を測定することにより、地域高齢者に提供すべきケアを選定する際に一助となりうることが示唆され、周辺動作 SE と移動 SE の高低によって 3 群に分け、それぞれの特性に応じた地域ケア案が得られた。

6. 地域高齢者が転倒を意識する主要な行為、場面である移動動作が移動 SE として取り上げられたことにより、活動の範囲を広く保っている地域高齢者にも転倒予防自己効力感を測定できるようになり従来の尺度よりも天井効果が軽減した。

以上、本論文は FPSE が周辺動作 SE と移動 SE という下位尺度を持つことにより、多様な地域高齢者の FPSE を測定できる尺度できる点が独創的であり、FPSE の下位尺度の得点の高低に着目することで、限られた資源の中で高齢者の転倒予防自己効力感を高め、閉じこもりを予防する地域介入の方策を判別するための情報源となり得ると考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。